

# 我が上古の瓦に就いて

井 川 定 澄

我が國の藝術は今や世界の注視の的となつてゐる。而して其の藝術の要素は佛教的藝術であり、その起源は古く佛教傳來に遡るべきである。當時一大潮流をなして數多の諸文化が輸入された。瓦藝術なるものも其の一つである。さて本稿に於ては便宜上大和に資料を求めて論及せんとする。

## 一 起 源

元來瓦なるものは我が國に起源するものではない。佛教の傳來は我に新しい建築法を傳へた。瓦なるものも亦佛教建築等に附隨し來つたのであるが、たしかに東洋建築の一要素であらねばならぬ。尤も最初の瓦は朝鮮より移入されたが或はそれに模倣したものであらう。崇峻帝の御代朝鮮より瓦博士なる者來朝し、此處に我が國瓦の發達の礎を作したものである。其の後飛鳥時代には相當立派な人物が國內に現れ、所謂日本化されたる技藝としての瓦が構成さるゝにいたつたものである。

斯様に我が國に傳來したる瓦なるものの起源は種々に議論の湧出せられてゐる處ではあるが、實は支那に初まるものである。東洋における原始人は樹皮或は萱藁様のもので風雨を防凌してゐたのであるが、斯る性質のものは年々共に朽易く、此れをより防がんがために此に住居人の生活が必然的に變革せらるゝに至つた。勿論最初のものとは今日見るが如

き性質のものではなく、單に粘土を固めた程度の素焼に過ぎなかつた。むしろ壁に近かつたかも知れぬ。これが更に進んでは彼等が日常使用する食器の焼くが如く一層便利に強固に努力したのである。

斯くてこれが瓦としての形を呈するやうになつたのは支那周の時代の事である。當時は單に平瓦的の單一なものであり、この單一な平瓦を組合せて居たに過ぎなかつた。(關野博士説)。これが時代の流に隨つて發達し、紋様を附し、組立てを考案し、或るひは穴を穿ち、形を變へ、最初同一型のものが場所に依り、建築美を見出し、平瓦、巴瓦、其の他様様に發展を遂げたのである。即ち磚の如く更に降つては惡魔除けの鬼瓦まで變化發達を見るに至つたのである。

## 二 種類 及び 紋様

紋様に就いて重要なものは平瓦に見出す「忍冬」で所謂唐草模様である。勿論これでも日本古有のものでなく、これが起源に就いても異説が多い。日本に傳來した忍冬紋様なるものはエジプトに初まりギリシヤ、印度を通じて、支那に於て發達し、更に日本に於て種々に變化された云ふのである。所謂地中海に淵源を持たせる説である。然し更に今一つ有力な説がある。直接我が國に吸收されたるものは中央アジアより輸入されたる葡萄の蔓をモデルせる圖案化から來るものと説くものである。寧推古時代の唐草なるものは葡萄に良く似た感がせぬでもない。何れにしろ世界各地に使用されてゐる關係上其の傳播經路も未だ明かではないのである。現在我が國の何處の寺院を訪ねても凡そ佛教藝術と見るべきものに此の忍冬唐草を應用せぬものはない。斯る點において唐草が重要な役割を演じて居り、佛教傳來後の飛鳥時代には既に立派な作品を窺ひ知る事が出来る。

次に巴瓦の蓮瓣である。大要單瓣と連瓣(複瓣)との二種あつて、此れ等は全て時代を異にして其の趣を異にし雜多な形式を生んで居るが、蓮華崇拜の思想を孕む印度に起源するものである。

其の他紋様として、重弧紋、鋸齒狀紋がある。この二つは日本獨特のものであり、而も飛鳥時代に起源し發達し、奈良前記まで使用されたのである。重弧紋は平瓦であり、通常三段乃至四段で稀には二段のものも見受けられる。鋸齒狀紋は巴瓦、平瓦共に使用され何れも其の周圍に位置して居り、威勢を呈するものである。

平瓦、巴瓦は全然其の役目を異にしたるのに磚がある。これは支那、朝鮮に於ては早くから使用され、我が國に使用されるやうになつたのは飛鳥末期である。其の資料方面より考案するに、殆ど直接朝鮮の工匠の手に依るものにして、日本化されたるものは謂へ、支那隋、唐の作品と姉妹關係にあるのは必然的な成行きであらう。磚は全て板狀をなし縦横に多數併列せしめ、一面壁の代表として用ひられたかの如くに思はれる。磚は確に一種の美術品ではあるが、我が國だけに就いて云へば僅かに數ヶ所に止まり、他は未だ知られてゐない。斯る大陸的な磚は我が國の風土に適せず、保温生活上不適當な關係からか餘り用ひられず、且つ奈良前記以後には全然取り扱はれなかつたやうである。磚で一般的に知られたものは山田寺、橘寺の磚佛である。大さは普通瓦より小さく、横一寸、縦二寸の大さから横三寸、縦四寸位の大さで、一般に後者の型が使用されてゐる。磚と共に有名なものは岡寺の天人供養の磚、南法華寺（靈坂寺）、岡本寺の鳳凰磚である。我が國では此の三種があるのみでそれ以外には未だ發見されてゐない。就中鳳凰磚の如きは、世は恰も白鳳時代であり、餘程鳳凰の彫刻、繪畫が發達して居つたらしい。

### 三 時代 的 考 察

#### 一、推古時代

瓦の最初の發達は何と云つても推古時代である。此の時代には漸次的に佛教事業が行はれ推古卅二年には已に四十六ヶの寺院があつたと謂はれ、就中有名なのは、大官大寺、飛鳥寺、川原寺、豊浦寺、坂田寺にして、本邦瓦の端緒をな

すものである。當寺瓦の使用は寺院及び宮中だけに限定されて居つたのであるが、然し百濟寺の如きに至つては茅葺である等當時瓦を使用せざる寺院の多數あつたことも推案出来る譯で、それだけ推古瓦が尊重される所以である。一般に作品は簡單であり、平瓦の如きは左右の均整なく、複雑性無く線も幼稚だけに自然純朴な精神が表現され、強て特徴ミ云ふならば、精神的威力的曲線美があり、佛教遵奉の激烈さが遺憾なく發揮され、何處ミなく尊嚴さが窺はれる。

## 二 飛鳥時代

飛鳥時代ミは云ふが前半を推古時代、後半を奈良前記ミされたのが通例である。然し便宜上獨立させて考察して見るこゝとする。この時代は前時代に比して寺院の數は一段ミ増加し、技藝は巧妙になり、複雑な線の混入を見る。蓋しその有名なるものは成林寺、輕寺、奥山久米寺、山田寺、法嚴寺、法隆寺、法廣寺、大野丘塔、元藥師寺、應福寺、檜隈寺なり。當時代の特徴ミして二大系統が相對立し交錯してゐる。一つは百濟式系統、他は法隆寺式系統である。百濟式に屬するものは成林寺、廣原寺（元善光寺）、奥山久米寺、巨勢寺、輕寺にして其の特徴は巴瓦が單瓣なる事である。一般に瓣は直線にて表はされた菱形に近い四邊形であり、淺薄な線であるこゝミ、圍縁は高く厚く中の子房は七ツ九ツ十幾つかゞあり、瓣は八枚十枚十一枚、花瓣に長短があり、圍縁幅廣き故に一、二本の線のある事等は特徴である。大部分の平瓦は唐草ではあるが、中には山田寺、輕寺、田中寺の如き重弧紋がある。この重弧紋こそ日本瓦の獨特ミされるだけに興味も倍加される譯である。重弧紋は通常單瓣を伴ふが故に便宜上百濟式に含ませたのである。

法隆寺式系統に屬するものに元藥師寺、長林寺、法林寺、中宮寺、輕寺、藤原京がある。この種の巴瓦は通常連瓣にして、外縁に二條の線があり、其の二ツの線の中に相當大な子紋が見出される。平瓦は忍冬模様で上部ミ下部に各一條の線があり、下部ミ左右には鋸齒狀紋がある。上部には子紋が出来初めた。當期末葉に到つては連瓣にすら鋸齒狀紋が加味されるやうになる。線に就いて言へば推古時代が自由に廣細を利用したのに對し、此の時代は同じ太さの線、悪く

言へば、單調ではあるが、比較的正確な幾何學的紋様に變化したる事である。當末期に到つては鋸齒狀紋の如き雄健な感じを呈する。斯る鋸齒狀紋ミ子紋ミは奈良前記への變遷ミ過渡期を示すに足るものである。

### 三 奈良前記

飛鳥時代の末葉を受け續いで、大安寺、輕寺、檜隈寺、國分寺、橘寺、岡寺、弘福寺、藤原京等がある。巴瓦は主要連瓣多く一部精巧なる單瓣を見る。瓣内部は割合廣く、瓣小さく、子房の周圍に輪を有せる事等は當代の特徴である。飛鳥の技術を繼いで瓣に鋸齒狀紋ミ子紋を有するが、百濟系統なるものには周圍に子紋が無い。單瓣、連瓣共に瓣の數は八枚が通常で、中央の子房及び外部の子紋は大きく何れも其の數の増加を見る。全體的に觀るならば實は緻密で良好であり、飛鳥時代に類型し稍整感はあるも、一段の羸弱性がある。

### 四 奈良後記

聖武帝以降平安遷都までを言ふ。單に後記ミは云ふが其の名の示す如く、奈良前記の持續に他ならぬ。前代に比べては本質的に瓦に表現される純情そのものは滅却され、寧ろ建築は所謂天平藝術の色彩華麗に墮し、灰色の瓦は美術品ミしては廢黜されたかの趣きがある。随つて天平の粹は瓦の上からは消滅し、唯其の面影を刻するのみである。斯様に時人にミつての瓦は餘り問題ミはせられなかつたやうである。瓦師なるものも單に一個の職業ミされ、其の結果藝術から見たる瓦の價值は半ば失れた。強いて特徴ミ云ふならば、形式は前記に變り無く、線が細く且つ柔弱に出來てゐることで、何處ミなく空虚な感じを與へるものである。

### 附 其の後の瓦

凡そ瓦を美術的に考するならば大要奈良時代で盡きるのである。が然し後世に於ても種々の變遷は有り得べきことである。即ち平安京の美彩な綠釉瓦があり、鬼瓦に於いても其の時代の思想を代表して各其の表情を異にしてゐる。其の

他形の上から云へば鴟尾があり、信仰方面から云へば、平安時代、鎌倉時代の瓦經があり、更に近く徳川時代に於ては印刷術をして瓦版が用ひられた。尙時折り瓦面に落書きを見出すところがあるが、この落書きによつて當時の所謂建築家の繪なり字なりが窺はれる譯である。

#### 四 一般 的 考 察

吾が國の最も古き瓦を調査することは興味を惹起するに充分である。同じ建造物であるべき處から輕寺の如きは百濟系統の單瓣かと思へば連瓣があり、重弧紋に混入して忍冬模様があり、飛鳥時代かと思へば、奈良時代があり、其の系統形態を異し、時代を異するに到つては、蓋し大伽藍の建立は同時ではなかつた事を裏書する。かなり經濟にも關係し人夫の上からも相當困難を極めた事であらう。而も金堂、講堂、食堂、塔、廻廊、經藏に至つては其の形狀も自ら異なるものであり、工匠大工の變更も止むを得ぬことであり、彼等の思想技術も自ら異つて來る事が推察せられ得るものである。古代未知の時代から我が國に於て民族の移動と鬭争と和合が繰返しつゝも各自文化の交換をなし包和し咀嚼して行つたのである。瓦に於いても又同様であり、最初の瓦は彌生式土器の影響を受け、藤原京に到つては（奈良前記）祝部式一名朝鮮土器を多分に利用し、内部赤褐色表面灰鉛色、金屬音を發する等強固な作品を見る。これ等の事實は吾人に本邦民族の合流性を教へるものである。且つ又全國諸州に國分寺を建立された事は其の瓦に依り、支那に起つた文化が如何に速に極東日本に傳播されて行つたかを物語るものである。

瓦を藝術と見るこゝが出来るが、其の工作上から考察するに推古、飛鳥においては工匠は一種の名譽職でもあつたが、奈良前記及びそれ以降に到つては單なる職業に終つたこゝが賤作に墮す第一原因ではあるまいか。平安朝後の瓦を問題外に放逐されるに至るのも敢て無理ならぬ事であらう。佛教藝術は後記は前記に勝る説述する人もあるが、寧ろ

奈良前記は線が美的に強く表現され、精神も雄健である。少くとも互なるものは前記に於て發達し其の頂點をなすのはなからうか。或るひは又佛像の如きも、奈良東大寺にしても、式壇院の四天王、藥師寺の吉祥天女は天平の作品に秀でゐる。大體飛鳥時代は雄健ではあるが技術において古拙の感があり、天平後の美術品は技術進むに雖へども精神的な表現に缺いてゐる。これに反し、前記の美術は技術も勝れ精神も雄健である。更に天平時代は唐に數多の留學生を送つた時代でもあり、總ての點に於て唐を學び、而もそうなすことが一番文化の進だものである云ふ風に考へられてゐた時代でもあつた。我が國獨特の重弧紋、鋸齒狀紋の如き紋様の廢せられた原因は實に此の唐土崇拜に依るものであらう。

推古時代、飛鳥時代、奈良前後兩記の各時代を通じて其の時代を代表するものに建築あり、佛像あり、經卷あり、繪畫彫刻がある。が現存するものは其らの幾分かである。當時は立派な有史時代即ち文獻時代ではあつたが、然し其等の史的寶庫を守護しうるだけのものではなかつたであらう。且つ又有史は云へ年號の誤差を觀るに至つては當時の正確な經錄資料も餘りなさそうに思はれる。財寶の限りを盡した諸大伽藍も大火の前には一塵の灰に均しく消滅に歸するのである。吾々は實體を見ずしては如何なる詩歌の過去の形容も單なる陶酔に過ぎないであらう。遺物がその遺跡地に現存する云ふ點において瓦があり、而も中には漢字、梵字、或るひは文句が陰刻されてゐるに及んでは幾分なりとも史家を助くるものであることは明かである。

瓦が一個の技術である以上其の時代の藝術及び思想を代表するに足るものであり、一片の瓦の探究も敢て無駄でもない。瓦が美術品である以上、「事」の原理にして廢棄さるべきものではない。